

はじめに

朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に同春日町、新川町、名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落で、地形的には五条川左岸の後背湿地にあたる。当社はこれまでに、朝日遺跡の花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、樹種同定、胎土分析などの自然科学分析を実施している。今回は、当時の古植生に関する情報を得ることを目的として、自然流路（NR01）の花粉分析を実施する。



1. 試料

試料は、朝日遺跡（IAS01Ad）のNR01のベルトから採取された土壌6点である。各層から1点ずつ採取され、層の番号と試料番号は同一（1～6）である。2・3層はSD01（弥生時代中期）、1層は高倉土器の出土層である。ので、試料採取地点の柱状図を図1に示す。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

3. 結果

結果を表1、図2に示す。全体的に保存状態は良い。1～5層は木本花粉に割合が高い。コナラ亜属、アカガシ亜属、マツ属、ニレ属ーケヤキ属、エノキ属ームクノキ属などがみられる。草本花粉は、イネ科やカヤツリグサ科などが検出されるが、出現率は低く、種類数も少ない。6層は、草本花粉の割合が増す。イネ科の割合が高く、カヤツリグサ科などを伴う。水生植物の種類

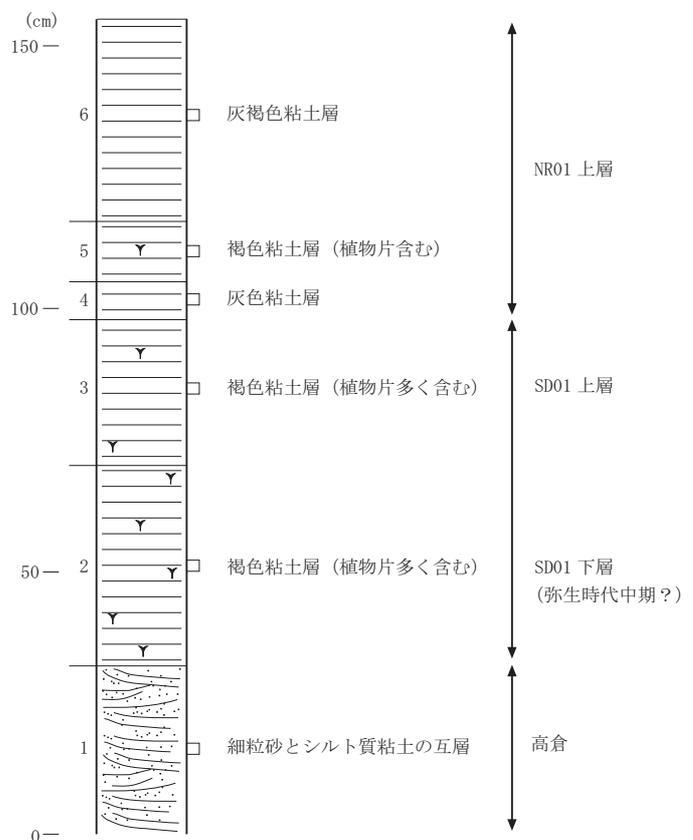


図1 試料採取地点柱状図

数が多いのが特徴で、ガモダカ属、スイレン属、ヒシ属、フサモ属などが検出される。

4. 考察

当社では、これまでにIAS63A区旧河道B西壁、IAS63A'区SD01南壁、IAS63A'区SX01西壁、IAS63D EAサンプル (SD04)、IAS63B・Cサンプル (旧河道C)・IAS89B・Aサンプル (南集落内環濠)などで、分析を実施してきた。その特徴をみると、弥生時代中期末から中世までの各時代を通じて、花粉化石群集はコナラ亜属とアカガシ亜属が多産することが特徴である。このうちアカガシ亜属は弥生時代以降の堆積層において増加する傾向がある。また、弥生時代中・後期の堆積物ではエノキ属ームクノキ属花粉が多産し、中世とされる堆積物では草本花粉が増加する傾向がある。今回の分析結果も、これまで当社で行ってきた結果と類似し、朝日遺跡において普遍的な傾向といえる。また、この傾向は、吉野・萬谷 (1992) の成果でも同様である。

2層、3層がSD01の覆土、1層は遺物包含層である。SD01の覆土は有機質であるが、コナラ亜属やエノキ属ームクノキ属など木本花粉が主体の花粉化石組成であることから、木本質由来の泥炭であるといえる。コナラ亜属ではクヌギなど、エノキ属ームクノキ属ではエノキなど湿った場所を好んで生育する種類を含む。これらは、SD01の周囲に生育していたと考えられ、これらの遺体が泥炭の由来になっていると思われる。その他、クマシゲ属ーアサダ属、ニレ属ーケヤキ属、サワグルミ属ークルミ属なども周辺の湿ったところに生育していたと考えられる。

4層～5層は、自然流路の堆積物にあたる。別

表1 花粉分析結果

種 類	試料番号	6	5	4	3	2	1
木本花粉							
マキ属		-	1	2	-	-	-
モミ属		3	4	5	-	7	5
ツガ属		4	-	3	4	2	2
トウヒ属		-	1	1	1	-	2
マツ属単維管束亜属		1	3	-	1	-	-
マツ属複維管束亜属		10	32	27	17	19	21
マツ属 (不明)		2	7	12	1	2	2
コウヤマキ属		1	6	1	3	-	1
スギ属		7	20	12	4	1	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		8	12	12	6	10	4
ヤナギ属		6	1	-	5	-	2
ヤマモモ属		7	1	-	1	-	-
サワグルミ属-クルミ属		1	3	1	-	-	1
クマシゲ属-アサダ属		8	1	1	2	4	4
ハシバミ属		-	1	1	-	-	-
カバノキ属		8	1	4	1	2	1
ハンノキ属		13	-	1	-	1	1
ブナ属		20	2	5	9	2	5
コナラ属コナラ亜属		44	44	40	54	20	70
コナラ属アカガシ亜属		42	15	21	27	18	24
クリ属		5	-	1	-	3	2
シノキ属		5	11	16	4	-	-
ニレ属-ケヤキ属		9	10	18	5	5	5
エノキ属-ムクノキ属		2	1	7	37	84	58
カラスザンショウ属		-	-	-	-	1	-
コクサギ属		-	-	-	-	2	1
キハダ属		-	-	-	1	4	-
アカメガシワ属		2	2	1	1	-	-
ウルシ属		1	2	4	2	-	1
モチノキ属		1	-	-	3	1	-
ニシキギ属		-	2	-	-	-	-
カエデ属		2	-	1	1	-	-
トチノキ属		2	1	-	-	-	-
ブドウ属		1	15	-	1	10	1
ツタ属		-	11	4	4	8	8
ノブドウ属		-	-	1	-	2	-
シナノキ属		-	-	-	-	1	-
ツバキ属		1	1	-	3	1	-
グミ属		-	29	4	-	-	1
ウコギ科		-	-	-	6	9	1
アオキ属		-	-	-	1	-	-
ミズキ属		-	-	1	-	-	-
ツツジ科		-	1	-	-	-	-
エゴノキ属		-	-	-	2	-	-
イボタノキ属		6	-	-	3	-	-
トネリコ属		1	-	1	1	1	-
スイカズラ属		-	2	-	3	-	-
草本花粉							
ガマ属		-	-	1	-	2	-
ミクリ属		-	2	-	-	-	4
オモダカ属		2	-	1	-	-	-
イネ科		116	22	29	38	18	43
カヤツリグサ科		13	9	17	7	3	4
ミズアオイ属		-	-	-	1	-	-
クワ科		-	-	-	2	2	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	3	6	-	1
タデ属		1	-	-	-	-	-
アカザ科		1	2	1	-	-	-
ナデシコ科		-	-	-	-	2	-
スイレン属		3	-	-	-	-	-
キンポウゲ科		2	-	1	1	-	-
アブラナ科		1	1	-	-	-	2
ウメバチソウ属		-	-	-	1	1	-
ワレモコウ属		-	-	-	1	1	-
バラ科		-	1	1	1	-	-
マメ科		-	1	-	1	1	-
トウダイグサ科		-	-	-	1	-	-
アカバナ属		-	-	-	1	-	-
ヒシ属		1	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属		-	-	1	-	-	-
フサモ属		1	-	-	-	-	-
セリ科		-	1	-	-	-	-
ネナシカズラ属		-	-	-	-	1	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	1
ゴキズル属		1	-	-	4	2	2
ヨモギ属		9	10	11	5	4	9
オナモミ属		-	-	-	-	2	1
キク亜科		-	-	-	-	1	-
不明花粉		2	6	6	15	1	2
シダ類孢子							
サンショウウモ		-	3	-	1	-	1
他のシダ類孢子		44	32	90	31	20	55
合 計							
木本花粉		223	242	206	214	220	223
草本花粉		151	49	66	70	40	68
不明花粉		2	6	6	15	1	2
シダ類孢子		44	35	90	32	20	56
総計 (不明を除く)		418	326	362	316	280	347

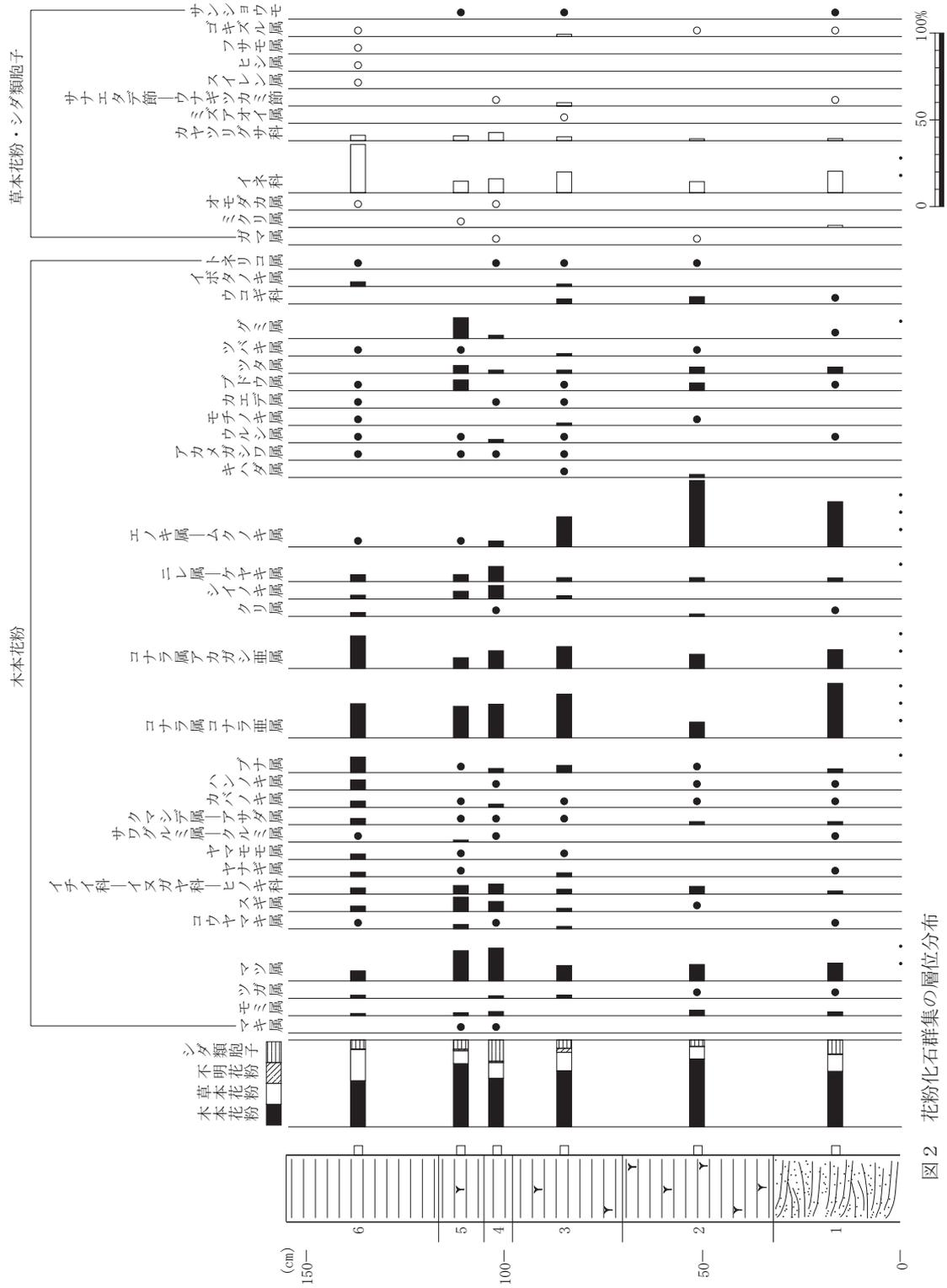


図2 花粉化石群集の層位分布
 出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

報の (IAS01Ca) と同様、堆積物が細粒で、水生植物を伴うことから、池沼のような状況下になったと推測される。なお、朝日遺跡の谷が池沼化したという状況は種実遺体の成果からも同様に得られている (此松・粉川, 1992)。また木本花粉は、優占する種類がみられないことから、広範囲な植生を反映しているものと考えられる。検出された種類のうち、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ブナ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などは丘陵地などに、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属などは低地にそれぞれ由来するとみられる。6層では、水生植物 (ヒシ属、スイレン属、フサモ属など) の種類数が増加することから、埋積が進んで水深が浅くなり、様々な水生植物が湖面に生育するような状況下になったと考えられる。この傾向は、別報 (IAS01Ca) の成果と同じである。

引用文献

- 吉野道彦・萬谷さつき (1992) 花粉化石からみた朝日遺跡. 「朝日遺跡 自然科学編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集」, p. 59-69. 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター.
- 此松昌彦・粉川昭平 (1992) 朝日遺跡の大型植物遺体. 「朝日遺跡 自然科学編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集」, p. 151-157. 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター.